



■ 鳶ヶ森層は、古生代の海に積もった堆積物が石となった堆積岩からできており、決まった方向に割れやすい性質を持っている ■ 2枚の殻を持つシルトスピリファアの化石。九州の有明海には同じ仲間のミドリシャミセンガイが生息し、生きた化石と呼ばれている

奥州遺産

―ときを越え
受け継がれるもの―

第92回

鳶ヶ森層露頭

Ⅱ 前沢生母 Ⅱ

「富士の根山」の林道を歩くと、所々に赤茶けた岩石が崩れている場所がある。鳶ヶ森層の露頭である。足元の石を一つ拾ってみると、貝のような生き物の化石が見つかるかもしれない。

それは、今からおよそ4億年前、赤道に近い南の海に生息していたシルトスピリファアの一種だ。貝の仲間（軟体動物）ではなく、腕足動物に分類されており、ここで見られる種類は古生代デボン紀を代表する標準化石とされている。

はるか遠くの南の海の生き物の化石が、なぜ奥州市で見付かるのだろうか。地球の表面はプレートと呼ばれるいくつかの大きな板に分かれて動いている。鳶ヶ森層は、長い時間をかけて移動してきた堆積物が日本海溝に沈み込む際、陸側のプレートに張り付いたもので、付加体と呼ばれている。

山中で見つかる海の生き物の化石が、日本列島の成り立ちを物語る。

広 告